動き出した新進気鋭のチカラ

“真の日本人”をこの手で育てたい

大谷 義武

武蔵コーポレーション株式会社

※収益用不動産による資産形成・資産保全のコンサルティングに特化したプロフェッショナル集団

武蔵コーポレーション株式会社（本社・さいたま市）の代表取締役・大谷義武氏は、「真の日本人」を育てる学校を創設することで日本のためになりたいとして、大企業を退職→起業した異色の経歴を持つ。11月21日、貴重なお時間をいただき、日本と若者に対して檄を飛ばしてもらった。

人生の幸せと仕事の充実は不可分

大谷 義武 氏　おおや・よしたけ
武蔵コーポレーション株式会社代表取締役社長。東京大学経済学部卒。三井不動産株式会社勤務を経て、05年に有限会社武蔵コーポレーション（現・武蔵コーポレーション株式会社）を設立。

――著書『大企業は20代でやめなさい』が注目を集めています。

自分で言うのも何ですが、大学卒業後に就職したのが、いわゆる大企業だったんですね。そこで働くうちに「このままこの仕事を続けていて良いのだろか」と悩むようになりました。

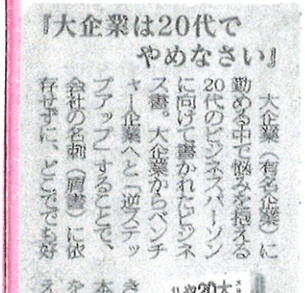
働き口としては安定しているのでしょうが、私でなければできないという性質の仕事ではまったくない。本書は、そうした私の考え方や経験などをまとめたもので、没個性というか、大企業に勤める一方で、自分自身の人生に疑問を感じているという若者が自分を見つめ直すきっかけになって欲しいと考えて書き下ろしたものです。

――大企業で働く中で感じる疑問について、もう少し具体的にお願いします。

人間は仕事が充実していないと、人生そのものに幸せを感じることが難しいのではないかというのが私の持論です。最近よく耳にする言葉の一つに「ワークライフバランス」というのがありますが、どうやら仕事と人生をまったく別のものとする考え方のようですね。けれども、一日の大部分を費やす仕事の時間が楽しくないのであれば、生きることに幸せを見出すのは難しいのではないでしょうか。

私は仕事において幸せを感じるためには「やりがい」と「収入」の二つが大きな要素を占めると考えています。収入が多くやりがいも大きければ、「幸せ」を感じる確率はかなり高いはずです。また、いずれか一方が充実しているという場合にもそれなりの幸福感が得られるでしょう。そう考えると、収入もやりがいもないという状態が最も不幸であると言えるのかもしれません。

大企業は以前から相対的に収入は安定していましたがやりがいはあまりなかった。しかし現在は大手企業でも大規模なリストラが断行されるなど、安定した収入はおろか、雇用機会すら危うくなっており、なかなか幸せを実感するのが難しくなっています。



『大企業は20代でやめなさい』

大企業（有名企業）に勤める中で悩みを抱える20代のビジネスパーソンに向けて書かれたビジネス書。大企業からベンチャー企業へと「逆ステップアップ」することで、会社の名刺（肩書）に依存せずに、どこでも好きな仕事をするために、本当の意味での「幸せ」を手に入れようという考え方を示している。

大企業は20代でやめなさい
幻冬舎
1300円（税別）

使命感を持って働いて欲しい

――終身雇用も年功序列も安定成長も崩壊したと。

大企業の仕事というのは誰がやっても同じ結果が出るように仕組みが完成された状態にあります。その意味では、大企業で働く際に求められるのは、出来上がった仕組みの中で能力を発揮することなのです。ですから、米国などでは、優秀な人材は仕組み化が完成されていないベンチャー企業に身を投じたり起業を目指すことで自己の能力を発揮できる働き方を求める傾向が強い。しかし、日本の場合には学力偏差値が高い人ほど大企業に就職したい・するという考え方が根強いため、その人なりの個性や特技、能力を十分に発揮した働き方ができずに悩む人が多いのだと思います。

基調講演を務めた「人材獲得＆育成セミナー」では、キャリア担当者に熱いメッセージを送った

――大学生が就職活動を進める中で価値観はどこに置くべきでしょうか？

やはり、自分はどうしたいのかという「思い」でしょう。あるいは「好き」か「やりたい」のかと換言してもいい。

社会には非常に多くの仕事があるにも関わらず、多くの学生が卒業後の進路として考えるのは、「安定した企業に入る」という選択肢です。安定志向の若者ばかりでは活力が失われて日本の国力の低下につながりかねません。ですから、就職を意識する前からいろいろな仕事の存在を知り、自分の興味はどこにあるのか考えることができる環境があればいいのではないかと感じます。

例えば、漁師の仕事を知って「おもしろそうだな」と漁師を目指す若者が増えたり、宝石デザイナーに憧れを持つ人がたくさんいたっていい。もちろん、ごく普通のサラリーマンになりたいという希望があったっていいんです。要は、自分の好きなことで自己実現する若者が多くなることで、日本のさまざまな産業が守られ、結果として国としての力の増強にもつながる可能性があるのではないかと指摘したいのです。

――現在の教育に対するお考えをお聞かせください。

まず思うのは、道徳や歴史、古典の教育が不足しているのではないかということです。人は歴史を学び、自分たちがどのような道を歩んできたのか知らなければ、何をすれば良いのか分からない、言わば根無し草になってしまいます。しかも現代的な日本人は自国の歴史を熟知していないために、日本という国家自体に対して誇りを持つことがいま一つできていないような気がします。

結果、自分が人生の中で目指すべきこと、なすべきことが分からないと悩む人は、学生だけではなく、社会人にも増えているのだろうという気がします。

――手厳しいご意見です。

若者の中には自分はこう生きていくんだという使命感がなく、目的地がないままに漂流している印象があります。誰かの役に立ちたいというのは、日本人が古来から備えている美徳ですが、少し視点を変えて、自分のためだけに生きるのではなく、自分のしたことが誰かの役に立つような仕事をするという考え方ができないか。そして、経済的な自立を果たすことに加えて、会社に頼らずとも働いていけるような力を身につけるために努力を続け、自分の役割を全うすることで日本に貢献できる人材へと成長できるのではないでしょうか。

――壮大なプランがあるとうかがっています。

本来、トップクラスの大学では、世界に伍するため、日本を背負っていくエリートを育成しなければいけないのでしょうが、そうだとすれば現在の教育は十分でないように感じます。それに偏差値が高ければ良い、自分だけ幸福ならそれで良いというような利己的な人間が増えかねない現状を憂えています。

そのこともあって、実は、私には学校を創りたいという大きな目標があります。構想の根幹にあるのは小・中・高の一貫教育体制で、国家の将来を考えつつ人を幸せへと導くことができる、その意味では〝真の日本人〟と呼び得る人材を育成したいと考えているのです。それほど遠くない未来に実現させるべく現在は準備を進めています。ご期待ください。

次代の国際リーダー

2014年9月、新たなリーダー教育を展開するそれがインターナショナルスクール・オブ・アザック）だ。その設立準備財団の小林りん代表背景などについてうかがった。

小林 りん 氏　こばやし・りん
東京大学経済学部卒。外資系金融機関勤務などを経て、2005年スタンフォード大学国際教育政策学修士課程修了。国際連合児童基金（ユニセフ）職員として勤務したのち、09年より現職。

ところは、世界を舞台に新しい価値観を創出し、次の時代を牽引できるリーダーを育てるということです。

リーダーというと、政治家や起業家などがイメージされがちですが、決してそうではなく、食を共にする中で、互いに認め合い切磋琢磨していく場を大切にしていきます。

そして次は「問題設定能力」です。昨今は問題解決能力が一面的に強調されていますが、降ってきた問題を解くというス

高校時代の経験がいまにつながる

――ISAK設立に至った経緯を教えてください。

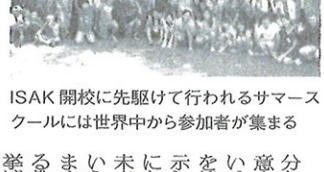
私は小学校から高校まで日本の学校に通っていましたが、高校時代に二つの転機がありました。当時在籍していた高校では、5教科をまんべんなくできるような教育がなされ、苦手科目を克服させようとする傾向がありました。得意分野や好きな科目をなぜ評価してくれないのかが不満で、その高校を中退後奨学金を得て、単身カナダの全寮制の学校へ転校したのです。

そこでは、常に自分が何者かを問われ続け、何ができるかを考えさせられるという、いわば日本とは正反対の教育環境が待っていて大変驚きました。

また、メキシコ出身の友人の実家に1カ月間滞在した際、その友人の兄弟が全員働いていて誰も高校には通えておらず、しかもそれが一般的なことだと教わりました。友人は奨学金をもらえたから学校に行けたといいます。通学して学ぶのが当たり前だと思っていた私にはとても痛感して。これからの社会全体にインパクトを与えることができる若者の教育が急務なのだと悟り、現在のプロジェクトにたどり着きました。

――起伏に富んだ半生との印象です。そうした活動力の源泉はどこにあるとお考えですか？

自分自身が常に何者であるかを突き詰めていくことが大事なのではないでしょうか。自分が得意なことは何か、情熱を持てることは何かを絶えず考え抜くこと。それが私にとっての「教育」です。一度しかない人生ですから、どうしたら自分らしくて考えておられることを改めて痛感した次第です。目的を共有できる他の教育機関もたくさんあり、私たちの取り組みにも温かい支援をしていただき本当に



ISAK開校に先駆けて行われるサマースクールには世界中から参加者が集まる

あり、楽観主義は意志によるものである」という言葉が私は大好きです。悲観するのは簡単で、それは気分や周囲の影響によるものが大きいとの指摘です。

一方、未来を楽観するのは自分たちであり、しっかりとした意志を持って未来を描き出していくことが大切だ、当事者意識を持とうということをアランは示しています。何にでも悲観的になるのではなく、楽観できる未来に自らの力で変えていくという気概を備えて欲しいと思います。そういった人材を輩出する教育機関の一つとして全力を挙げることをお約束します。